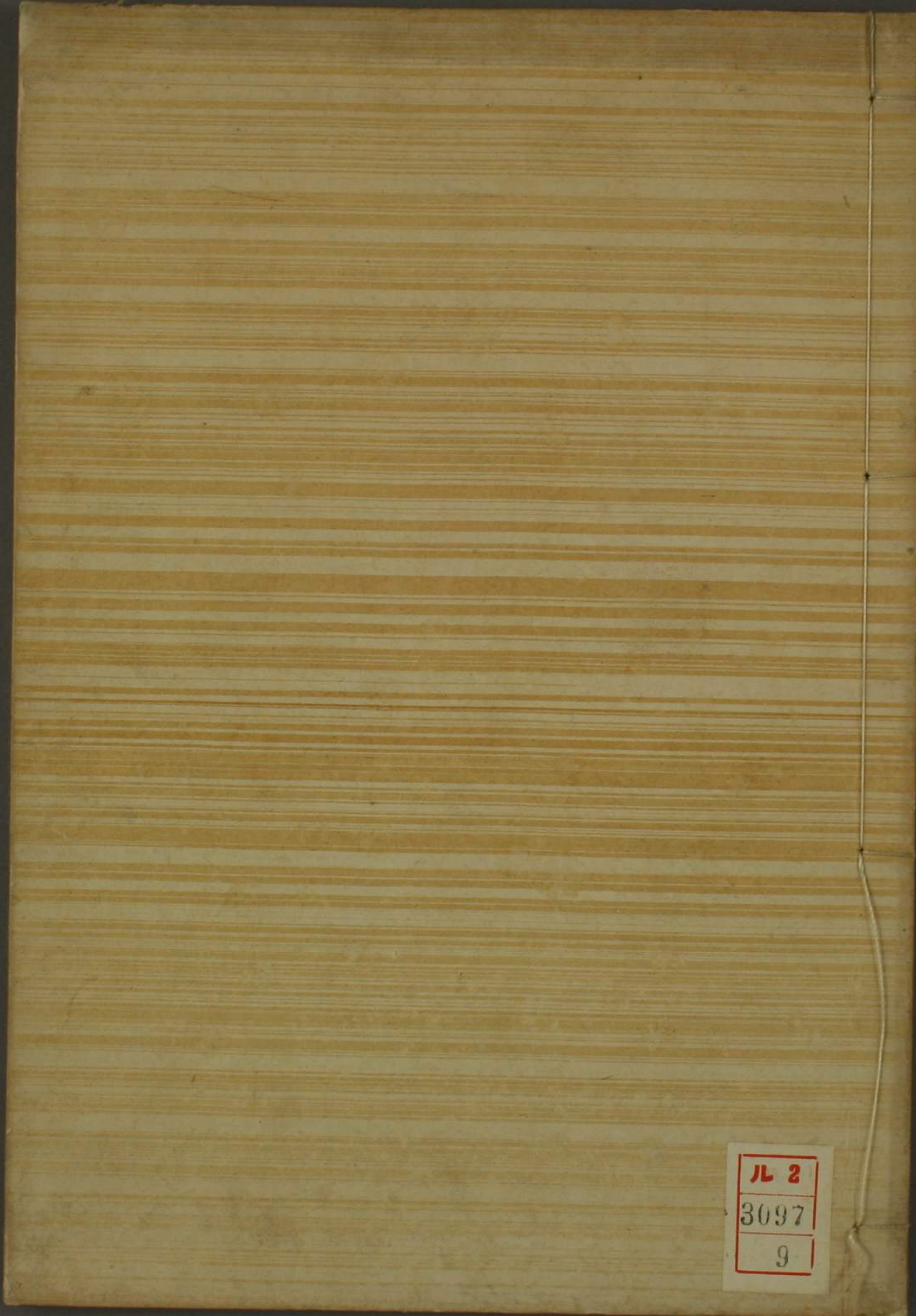


Kodak
LICENSED PRODUCT

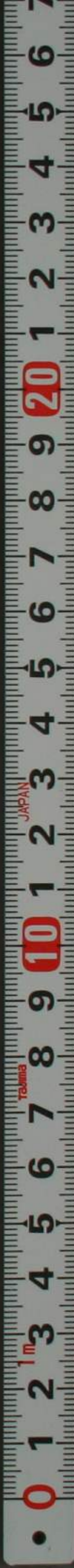
© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27



ル 2
3097
9



門 九 2
號 3097
卷 9



日本行紀

第二十一篇

江戸港へ回る

暴風

日本の美景

「ムモト」の膳大

浦賀の集議

響應

出行

日本人と親交

早稲田大学図書館
第262.5
冊 来

和親の緒

二月十一日黎明陸地を尻り是江戸港南の群嶋
あり第一嶋の南際より高四十尺より五十尺に至
る火山あり其噴火口の黄灰或は硫黄を以て之
成実つ東北の細風時成近て漸く猛く成り行く
日没少後細風變じて暴風となり「コムモド」船
成斜に迂曲して風は逆ひて行くと余終日甲板
上より在り「ヘント」名君と共に沿海成測量す寒殊

甚しく「^{アムステルダム}華氏名人の驗温器六十五度より四十度に
降る寢床に入る十一時の頃暴風殊に烈しく是
に因て乗るたり人悉甲板上に台上らる天地震
鳴暴風猛烈なり一時として濛霧晦暝百歩の外
絶て見らへり寸小雷面成鞭り目殆ど閉くへ
り寸風鳴ハ恰も天中より巨大なり金鼓を鼓
るること霧深れば他船の火成見ること亦是
に因て兩船互に駕るの懼甚危し帆船は殊に然
り然るる風地方より吹来りし故に海甚しく
凸凹を生せり是に因て火船全く其用を

失ふよりよハ至らざる事

朝日四ニ至て浪微平く七時ニ「コムモト」更ニ
号令して旗章船を尋常距離ニ列ぬ此時「イツル」
伊豆の岬の東ニありき北面の海濱ハ静平あり
り

諸船「ハトワラ」小田の港「江戸港の西」江過く此所
にて「マセトニア」船暴風の夜珊瑚礁ニ膠く「ミス
シスピ」船命を奉て之救援ひ容易穿出たり「マセ
らう」是ハ為ニ此日江戸港ニ入る事を得たり
き

是因て此夜の爰ニ碇泊す日没後「キミン
グト」船同「ク」此ニ来る「ワタム」船「プロト」船
船ハ帆景ヲ又ハ寸是ニ因て人ニ少「ク」心
勞む

十三日朝「ホウ」火「タ」火「ハ」帆「タ」帆「タ」帆「タ」帆
「ス」火「バ」帆「マセトニア」帆を「ス」帆「スク」帆「ハ」帆「ニ」帆「ハ」帆
「キ」帆「ニ」帆「グ」帆「ト」帆「ニ」帆を牽繩繫て直ニ江戸港ニ向ふ
此朝見た「ク」壯観ハ極て美「ク」因て過日我思ふ
出「ク」風復減て愉快細風とあり夜中ニ二三の雪
の嶺ニ由日出て天象清朗ニあり其高ハ五十尺

七十尺に及る雪山の一脈其状圓哉三分に二は
ニ類たり富士山といへる火山諸山ニ聳拔巍然
として高嶺露す山悉白雪の降積し中ニ一點
火坑の黒紋明し其跡を尺寸怡も牙爾白諸嶺の
氷山中ニ獨「エトナ」山の高く聳立る如く水上ニ
浮遊ちり濛氣旭日ニ映ひ一幅の全畫上ニ薄色
の玫瑰色を加へたり此日天氣寒冽りりぬと
もあつた其美景哉其お、貞写して永く傳へ
ずさし畫器を執る事能きあり
午後相撲の山嘴成廻り二時ニ浦賀の舊泊所成

過き毎記したる地岬吾儕の名りり「リュビ」
意太里亞國ニ達しりり時ニ「リュタムプロ」
の河名を取ニ達しりり時ニ「リュタムプロ」
船の先つて廣き灣中ニ碇泊しるをえて心哉あ
ん寸此処碇泊すりニ甚良りりれハ「コンモト」
号令を下し衆船を「リュタムプロ」ニ接て碇成
下名む其岸ニ對ひて連接り状恰半月状に似た
り
十四日二三の使来り船成浦賀の舊泊所ニ回
てよといふ其辭ニ曰く使君を請んりりニ浦賀
ニ其設をみりり「コンモト」ハ温言好辭

伐以て一ニハ断然として少くも動する色伐
示し之を罪て曰く彼理生ていさぐ曾て歩を退
るる習す

十五日終日諸船より大駁船を出して前年測餘
たつ港の北部の深淺廣狹伐測量しむ日本人少
し之を支障ささき此日風悪しく天寒くして
甚難^{ナシ}波り之う為ニ甚憊れて夕日辛ふして三
行字を書しのみふ

弟二月二十三日記す

日本乃官人こ多くの長く細く懸合の後

終ニ相談極まり甲比丹「アダムス」船旗甲比丹也
伐浦賀ニ遣し帝家の目付と是あての懸合を為
さしめんと約す

弟二月二十一日の朝甲必丹「アダムス」多くの^{トモ}僮徒
を召具し「アンタリヤ」^各船ニ束り移る此船ハ「アダム
ス」を浦賀ニ送るへき由あり余も亦其行中ニ
あり

我々船中ニ入るや否や前例の如く日本の使者
船中ニ来りて我々を同道す我々只今棧を下り
る所より浦賀までハ急度其る十五里あり其初め

ハ順風向^り。我船いも、浦賀の地嘴を繞^り
さる前風俄ニ變^りる頗烈^しき西北の風浪^は逆^ひ
て船を行^くさるへ^らす二小時の^り此地嘴を
繞^りおてんと大ニ肋骨を勞^しら^しと終^ニハ
陸地の風蔭ニ棹を下すへきことくふれ^り我^は
舟き^らる日本の道者ハ此夜我船中^に一宿セ^り
めん^と請^ふとも肯てこれを承諾セ^り何の仕形
ニて浦賀まで行く^もや書付見セ^り綿密ニ下
文の号令を下セ^り使者の僣^{トモ}後^トよて残^りす二艘
の小舟ニ乗^り浦賀へ歸^るへ^らと^り此事を^り

去^る遂^にんとて風潮の怒^り水^を凌^ぎ身^を捨^てり^し
りき終^ニ地嘴の後ニ繞^りお其船^をす^るる^る
り暴風浪ハ思^はす劇^しく續^き四本の棹^を
残^りす海ニ下^する^る此暴風浪ニ兼^て霰^を
交^へた^り寒雨降^出セ^り幸^ニ我輩^はシエ^ハハ^シ名^船
の樂器を携^へ来^りし^しハ終夜面白^く樂^ま暮^り
ル^り明朝ニ及^て暴風逆浪終^ニ静^まり^し棹^を卷^揚
者^は再^び帆^を開^き船^を発^す
此^は弟^二月^{二十}二^日の^りコロ^ドシ^ハ幸^盛頓^の誕^日
ニ^て是^の如^き成^否我^一決^する^る會^合ニ^ハ撰^びて

もふき吉日あり我艦舳二桅ハ大あり國旗を飄
大桅ハ「ウイムペル」の長方を翻す其長サ殆ト甲板
の上まで垂るへ十一時ニ浦賀の對面より來り
前年我々の船を泊せしと同一所ニ棧を下す
使者再び船中ニ來り十二時ニ我々上陸す此時
ハ正ニ我船ニテ「カ」ニ砲を開て祭祀の礼を行
へる時あり今次ハ我々和睦の印として軍陣の固
成設りて又小銃をも腰帶ニ挿りす唯士官輩劍
を帶たるのみなり
浦賀ハ江戸の輸入の港口なれば一艘の小舟ニ

ても此地ニ繫きて吟味を請はれ港内ニ入り我
許さす日本人の是地ニテ會議せんと欲るハ恐
らくハ此故ニ由れり府内の寄付の家々のるの
海濱ニ三四の建物あり今度の會議のつらに設
多たり盡く白黒の端物の幕ニテ引絡へし此幕
の陰ニ新奇を好み土人多く圍咽す數十の棒
を取たり男子等漸くニこれを制しとめたり一
種の前殿の入口ニ對して先づ羅所ガジヤの一種を設
く内ニ八人着くハヤ人の土人あり其兵器ハ紅
き天鵞絨のかぶせもの内ニ入れ番士の後邊ニ置

たゞ此前殿の茅二戸の側より又一の箇所あり
六位の七人これを守衛す此者の唯用むる所の二
カを腰に鎧ハたるのミ此前殿より大正殿ニ来
る其殿の終りより一區の地を柱より圍ミ^{按す}床を
以紫の緋の「バルダシ」を被ふ掛幅あり此殿ハ
五十「シケ」^{シケ}の地を「シケ」の長サ二十五「シ
ケ」^{シケ}の濶サよりして高サヤ二「フット」^{我一尺}ニ寸許
あり十四「フット」^ニあり左ニ椅子を設く我輩の
坐するは供するあり毎椅の前ニ小草を置く椅
子の對面ニ帝家の目付の人の坐を設く但

は卓子を置きす殿内の敷石の処をハ織ハ織りし
る藁席より覆ひ其中央ハ天あり銅製の火鉢ハ
個あり各々黒く漆髹^{カミスリ}セリ木は鍍金^{カウキ}の金物を抱
ゆる臺の上ニ駕す火鉢ニ白き物を入れ其内ニ
て炭火を熾^ヒたり此正殿の景趣ハ甚^{よし}に簡ふれ
とも風致ありて怡ふへし西邊ハ廊廡あり油紙
にて張たる窓を造り此廊廡内ニ一百五十人
より二百人までの日本人國風の如く尻を足^ヒ踵
上ニ當てて坐す
我輩席ニ進め速ニ三個の帝家の目付も歩ミ

出て我輩ニ對して席を占む迭ニウレク礼儀
を為して其議會の事ニ及ぶ日本人一切會議
の取扱ハ浦賀ニて為さんと欲す然れども「コム
モト」^{の彼理}ヲ所存ハこれと反して此地ハ海底
の土性攪を下すニ宜しうす然れども此地より
後ニ退くを喜ハされハ今彼屋々船を泊り所
向ニ對せり府内ニて會議して取扱ハ人ニ只管
ニ云ヒ募れり目付此故障を述へて甚々煩ハ
られハこれを打挫くら為ニ彼理ハ我莖氣船の
内一艘ニて諸人を残らす我會議スルニ欲する地

さて引連行くへ」と云ひりりこの取計ハ并ニ
其餘の二三件ハ甲必丹^{アケマス}當より書付ニて其
所存を云ひ述へりり日本人ハ思慮すり体ニて
明日其事と返答スルニ契約セリ此よて早く其
丁寧懇切の情あり大切あり事柄を考ふ
へ
是ニ於て目付共ハ立去られハ續て浦賀の奉行
宗左衛門及ひこれに附りり將士二三の點心^{ナカ}を供
寸即ち茶菓子橙等あり茶ハ青く白き磁盞を漆
髹せり木臺ニ載せて順々に勧む其菓子并

ニ橙ハ漆髹ヤリ盃ニ入きたり其盃ハ至て美廉
ニ置上ケ細工を為し切ニ鍍金を為セリ
一雙客位の前ことよニツの銀の徳利を置く其大
一「フランス」半を内るへし其一ツハ「カツキ」酒を
入れ其ニツハ「シリ」美淋を入る「シリ」ハ甜美なる
酒あり共ニ米にて製す味「ミスカデルウエイ」
略々似たり余ハ始の指帽ミカ「バウ」の大サあり酒
盃を足失ひたりこれよりして稍小しして匾平
あり漆造の碟子サにて酒を飲たり
其内風大ニ吹出し小艇を以て本船より行くべから

さう不とあり是を以て用事ハ片付たれとも我
輩猶暫のる此席ニ留居まり
烟を喰し酒茶を飲みて賓主相共ニ猶更打和志
ルレハ双方互ニ信実の形ニ成りたり一人の通詞
頗善く英吉利語を使へり甲必丹「マキスウェル」に
学ひたりと言ふ「マキスウェル」ハ米利堅の鯨を漁
する人ニて其船伊豆の海面にて破船し四年め
間松前ニ囚られし後一千八百四十九年ニ我嘉永
二年ニ當「プレプト」名号より軍船にて送られし「マ
ストル」ホルトマニ及余ハ通詞等と和蘭語を使

へり其の他人に語らば務めて畫圖して曉ら
せめたり我等々衣たる一様の衣服劍鐘表其餘
吾人の身は附き携へたる品々を注意を付て
吟味せり又好く日本の著大なる事を云ひ頭
ハセリ又彼等の刀身をも我等これを足るこ
こを得たり然らされ人の知れり如く日本人
ハ意を用ひてこれを鞆におさめて安んばこと
ありさるる此刀身ハ勝れて精緻にして青色
を帯たる鋼鉄あり其利あること一片の薄き紙
を又上にて切らよ至まり又我金銀貨錢も大

彼等の思を着くる所にて毎貨の價を知らんと
欲す然れども日本の金銀貨ハ我等これを足る
ことを得す尤意を用ひて合衆國の「サツリカールト」
衣囊に入る地圖即を讀み各國の氣候産物を問
掌中小地圖と云ふり
ひ又至て綿密ニ金山を問每人其地ニ往き黄金
を採る事誠ありや其地ニハ我許艘の船ありや
金山までの路程幾何里の遠サありや何故ニ許
多の米利堅船日本海ニ来ルヤ其言ふ所にて
ハ松前の海峡ニ一年の暮ニハ百七十艘余の船
を足ると云へり此船隻ハ米里堅の捕鯨船なり

らく數度繰返しくして此海上ニ足うる時ハ我
國人の利潤些少の事ニありいと見えたり日本
の品物の中華麗ニ造りたる象眼儀木板の書物
勝てて精巧なる細工ニて黄金の金具を付たり
火繩銃長二「トイム」は過する火繩小銃并ニ諸色
の旂幟就中日本帝の旂旂を畫きたり書冊を足
し終ニハ我輩の忠誠^{チウセン}ニ心氣^{シンキ}ニ舒暢す數個の
少年童立ちたり日本人我等ハ帽子を冠り我等ハ
褂^{カウ}を衣て上下ニ遊歩しこれを以て喜をふかに
至きり

晚ニ向ひて風静まり我等再び「トイム」は返
り得へくありし時同行の中某^カ等ニ共ニ日
本人の小舟ニ乗りたり天氣甚寒くくハ薄
衣なり日本人ハ大ニこれは困めり因て「トイム」
^{トイム}及^{トイム}ハ其餘の一人をハ我ハ大褂の内ニ入
る此人ハ通詞ニて愛すべき壮年の者あり餘の
同行の人も同じく褂ニて人ニを包ミ入ルル此
事更ニ又大なる喜悦の一事となり我等本船ニ
上るとき氣の毒ニ別を告ぐハ諸人我等賓客の
礼俗ひけ其行儀調熟ちるを大ニ満足せるに

ある

二十二日の朝舟り学左衛門船中より来り答す或
交す其辭ニ曰く日本人の支那人和蘭人とのミ
許したる律令ハ亦決定して米里幹もこれに準
すへきよきを告示す是故ニ帝家の目付ハ唯「コ
ムモドシ」の彼里より浦賀ニ来りて會盟の委しき談
合を為すを待す

「ホラハタン」名船中ニて第二月二十六日記十

二十三日ト猶浦賀ニ留り居り甲必丹「アタムス」
云ひたる「コムモドシ」彼屋ニ目付より返答す



を落ゆふく残りす取集めて其所置ニ五六の變
化を得せしめんこせし其後二十四日ニお帆
あり我一分隊の船隻故の所ニ又へさるりれ我
等々驚大うふく寸然れども其疑ハ我程ゆふ
く晴たく「コムモドシ」同日の朝屹度十里先の地
ニ其し楢を下すニ宜しき土性の処あれ其地
ニ航行せし其晚我船中諸船の到まり処あて来
乗り行り「シユステハンナ」名船を拒ることニ楢索
許

二十五日の朝再度使者来りて「コムモドシ」を慰

めて猶浦賀の方へのり戻さしめんと計らひ
あり然れども「コンモドレ」ハ決して此事を兼知せさ
ズルハ終ニ云へらく「アタムス」兼知るハ目付の
人、我等ハ船ニ来らんニ用意せり其来るハ雙方
の懸合をなすへき一地を擇ひ定めんとすむに
在りと語りぬこれハ頗る壯大なり神奈川府の
東半里ニ在る一地を擇ひ定む此府の前ハ我等
の一群の船を泊せし所なり其後直ニ浦賀ニ造
りたる假屋を取片付て上よ云へる地ニ再び經
営することを開始たり

日本行記

第二十二篇

會議ニテ和約決定の事

莊嚴あり支度

「コムモドレ」上陸

取持及饗應の仕方

日本地方散歩

本國よりの會釋

「アメリカ」國の贈物

條約在く成就

一千八百五十四年三月十一日江戸の湊にて記す

三月八日の朝朗あり春の天氣めてたく霽ハ
たり佳麗あり好時節を告知する暖日ハ碧天ニ
輝き只此よりこニ少しつゝ微雲たふひちるの
ミあり我輩の諸船中ニて早敷より多くの仕事
始り端舟を水ニ卸し砲及ひ弾薬を備へ海軍の
人等ハ盛服して兵器を弄ひ又仔細ニ吟味し
て夜中ニ白き皮紐ニ汚点ふことを生セヤラぬ
ヤ否ヤ改む半申板の上ニハ「エホラシット」肩ニ付けたる圓き

金糸の羨り金のトレスセシ類のふとの衣を衣
たりりの族装たり簡約ニ云へハ久く待たし
たりコムモドレ」彼屋ニ日本を目付の人々との行
儀正しき會議ニ就て務てらく盛大ニのさし立
たりたり
十時ニ至て大将の旂を立たし船よ里合詞ニて諸
の端舟ニ會議の事を知らせたり十艘の端舟ニ
砲を備へて中軍の艦隊とありたり其内ニて「ホ
ウハタニ」より「シユスケハンナ」の四艘の砲ハ二十
四「ポイント」砲ニて其餘ハ十二「ポイント」の「ホウウイツツユ

ルスを備ふ其稍輕少あり端舟數艘を以て兩翼と
かす其總數二十八艘たり「シコステハ二十」名船の
甲必丹「ビユカニ」小船隊の号令を司る

十一時ニ至て全横線隊船徐々ニ運動す横線を
為して分列せり三艘の「フシカット」船より音樂
始り二三曲を奏す一今隊を成せり八艘の大船英
吉利里法一里許の所ニ分列し端船も一直線を
為してこれと並ひ列す各小旗長旂を豎將士船
卒を配り載せたり其人々の兵器並ニ磨きて光
りあり大砲太陽ニ照映して比類稀あり景色を

を生きたり

六百員の兵士の上陸難なく相濟たり海軍將士
船中の其隊をハ「コムバクニ」ニ分ち初ハ一横線
ニて陣の前面を海ニ向て備へり其後其陣を
方形とあり方形の上端ハ會議の殿外ニ連りて
三側面を造りおす其第四面ハ横線ニ備へたり
端舟ニて作り洋面ニ縮て棹を下す

和「ハタニ」船より「コムモドレ」彼厘々為ニ祝砲を
を「十三発」開せり時此船の大「スループ」一種の人の
望中ニ入る船ニハ「コムモドレ」の大旂を飾きり

彼厘の隨身の兵ハ三十餘人の將校ニテ彼の上
陸を待請たり彼厘日本の地ニ上陸して隊中を
お行時將士相從て會議殿ニ赴く兵隊ハ砲を
レセシテール」の式ニふして會釋す國樂を始む同
時ニ「ホウハタニ」ニ帝國日本の旗を揚ぐ端舟の
砲其旗を祝て二十一祝発を為す其後帝家の
目付の旗をもあきて十七の祝発を為す（全權
宰相の為り）

會議殿ハ神奈川と同し然れとも前よりハ莊麗
ニ飾り且殿の正面の端ニ別室を造り八個或ハ十

個の椅子を設く「コムモド」及び帝家の目付數
人の通詞等めよめに次るる以前め如く諸人
先大殿ニテ各椅子ニ坐して會釋をふし其後尊
菜の人ニ會議の席ニ移る其入口ハ紫色の縮の
帳ニテ鎖したる其内ニ我等ニ饗應を出す四五
種の魚類數種の穀類を一つに知る事ふれれハ
記す事ありハ寸其内ニテ大よ珍らしく又ハ
細よ擦りたり菜蔬あり穀類の味を滋ツクうるハ
めんろ為ニ二ツの小さき鐘カネ子を供ふ其一ハハ
「ヤサウセ」醬油を盛り又一ツハ一種の辛き

調劑をりり此料理ニても日本人ハ風俗開多テ料理の仕方笑ふへうりるを知れり「アールスー
フ」吸物の類の一種を小さくして蓋あり蓋の盛
れり別して好き味あり麵包ニ代へて甘きシラネ 鮎菓
を薄く切て出す 按ずるにカス
テラの取 此諸菜穀ニ添て四五
種の飲料及び茶あり焼たる品及び砂糖製衣の
色々の饗應と共に勝きたる酒を銀の徳利にて
酌ルリ

日本の官人数、我等の船中ニ来りりれハ數員
の人と相識あり且其折を以て我邦俗ニて人

の無事を祝ひて酒を飲む趣をありたれハ余も我
度となく双方の盃を打當て郷音を起す 互ニ酒盃を
お當て兩人
こゝ飲むハ彼
國献酬の礼なり 終ニハ大ニ酔ルルハ茶ニ逃れて漸
頭め眩暈するを醒したり
目付との談論長うりれハ食事終りて我等の
朋輩の内ニハ日本人と共ニ烟を喰ふもあり其
内余等ハ少く道遠たり
天氣輕暖ニて看る人多く集れともカキ 憤悶ニ至り
寸永久ニ張りたる黑白の條の木綿の隔も「コム
モドレ」の言ひおたり口上の頼ニて此度除き

去ることふれ、余も野外ニ少く遊歩するに
差支ふくありたり冬の名残として山々の偏き山巔
に其景色を現し富士の山の白き雪帽子と爰に
まこと黒き班を生きたり小隊を結へり日本の
士人の兵器天日ニ耀きて其光彩あり我服の徽
章と共ニ此地方の景色をさうんこり平時より
ハ只一様の景ありのみありへり四時の後吾輩
本船ニ帰りぬ

千八百五十四年第三月第三十日

後一二日ニハ最初の死人を日本の地ニ埋るこ

とふれ其死人ハ「ミスシツヒ」船の水主あり○
一人の「コルポラール」二人を率ひて「ミスシツヒ」の
法師「ヨ子ス」と一二の将官と皆葬ニ會せり○通
行すへき村の入口ニ當り佛氏の僧ありて行列
の後ニ隨へり然るニ誰も之を拒む者非きハ其
僧自ら直ニ法師の後ニ位をあ免たり○其墓
墳の在る所の寺廳ハ小き僧房ニ續きたり○学
士「ヨ子ス」須要あり經文をよみし而て其軍り
し比ハ其僧甚丁寧ニ尽しして僅ニ經文を
記しし紙片をやき及び僅あり茶飯等を供

する事を以て己れは命を失はれたる故其事を成
んことを請ひし〇之を其人の欲する所は従て
付托するは日本人の意は甚能適へることに足
へたり〇凡て僧等の容めあき作業は死人の心
に取れて何の障礙もあらざるへし

余ハ此時務むる事有て己むを得ず屢々陸に居
たり〇吾々工師及び器械師ハ皆日本の帝への
贈遺を言より出して呈進するは痛く勤め
て有し〇其各種の新しき言を開きたるを見て
日本人愈々驚きたる〇是亦然るべき事あり

亜墨利加より呈せし贈遺ハ萬國に超へたるへ
りれはあり〇其鐵道を足し時ハ其驚殊に甚し
蒸氣車並に「ヒラデルヒア」地の「ノリス」人の製せ
る「ロウセン」及び「バリカントル」の村にて造り而
て其好の錠鍊を施したる乗車ハ皆余も亦嘗
て足知らざる不この珍奇あり模式あり〇其鉄
道ハ大抵輪を以て一里許に擴けて連ねたる〇
吾々器械師六あり龍吐水を以て試みる時ニ車
愉快あり樂ミを奏せし而て其水射注し専心
=眼を瞪して立ちたる日本の衆伴子申りて

顛倒セしめたる。○其贈遺の内ハ其種々の品
あり種々の用法をなす農器「フランシス」名の雑
船を救ふ銅船及び名高き焼けたる包ミ、
ろ船此船ハ繩を着て炸ボムにて雑船へ抛ち而て
雑船と海岸との間に引去り引來る如く製せ
る者あり許多の「コルツ」六発拳銃ピストル及び「バルルス」
二十四発の「ヒュクセン」諸種の器具諸種の食器な
り而て終りに亞墨利加の著述家の好書「アラツホ
ニ」名の亞墨利加諸島の美麗なる例書「ラア」も贈
遺の一ツあり是未曾て此より彼に贈るに如此な

ることハふき事あり○然るに何を以て持て如何
く盛にせしむるハ其諸色皆其発明者若くハ
製造者より政府より價ひふくして出せし者
なればなり但し其内一ツハ然らば即ち此終の書ハ
如きの其類極めて鮮き例書あり故に唯僅にも
償へき者あり○大英政府ハ其書ハ其書ハ其書ハ
如是なれば久しく懇請したる日本と貿易の條
約も遂に定まり而て第五月二十四日ニ兩國の正
敵より權官相會て麗しく其姓名を書記せり
二十六日ニハ帝國の權官を要し迎たりニ皇職

の日本人大抵六十人許其位次ニ從ひ華麗なる
礼服より来たり其儀容且つ和厚にて有里一吾
々後ハ將軍(當今の帝)の安全を賀し祝砲を発
して會飲し而て嘉客ハ寒具カンを供する為ニ備を
ふして合衆國の大統領の安全を賀して寒具を
食し而て其禮飲一節を遂てハ「ハイコムモト」ペル
リヨ向てハ「ハ」一齊へち氣宇にて献酬を終へ
る

